

巻頭写真 ヨルダン, ワディ・アブ・トレイハ遺跡—西アジア新石器時代の移牧拠点—
Wadi Abu Tulayha: A PPNB agro-pastoral outpost in the Jafr Basin, southern Jordan

ワディ・アブ・トレイハ遺跡は、ヨルダン南部の砂漠に位置する、先土器新石器時代B中・後期(Middle/Late PPNB: Pre-Pottery Neolithic B; 非較正年代で紀元前7000–6000年頃)の遺跡である。西アジアにおける遊牧の成立過程を明らかにすることを目的に、2005年度から金沢大学ヨルダン調査団による発掘調査が継続実施されている(基盤研究(A)20251006「移牧先農耕の盛衰と西アジア遊牧文化の起源」, 特定領域研究17063007「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」)。この地域の現在の気候は、年降水量50mmに満たない乾燥気候である。植生はほとんど見られず、ワディ(涸れ川)沿いにアカザ科, キク科, ハマビシ科等の草本や矮小灌木がわずかに分布しているにすぎない(写真1)。平坦面の大半はフリントや石灰岩が露出した礫砂漠になっている(写真2)。もちろん周囲に集落はなく、ベドウィンがヒツジとヤギを飼いながら、ワディ沿いの植物を求めて遊牧生活を営んでいる。



写真1 遺跡周辺のワディ(涸れ川)と礫砂漠。ワディに沿って植物がわずかに分布している。



写真2 平坦面はフリントが主体の礫砂漠になっている。遠方に見える土の山が遺跡。



写真3 移牧拠点の半地下式石積み遺構群。



写真4 ワディ沿いに建造されているダム状の石積み遺構。

現在はこのような環境下におかれているが、PPNB中・後期には、集落が存在していた。これまでの発掘調査により、東西方向に並んだ数十件の半地下式石積み遺構(写真3)が見つかっている。この遺構からは、狩猟具やガゼルなどの動物骨が多数見つかり、それぞれの遺構の入り口は垣に封鎖された状態で発見された。したがってこの集落は、定住集落ではなく、狩猟のために季節的に利用された狩猟拠点であると見なされている。その一方で、ガゼルの骨だけでなく、数点のヒツジ/ヤギの骨も見つかっており、狩猟活動の際、本村から家畜を連れてきていたことも判明している(本郷, 2008)。すなわち、西方の丘陵・山岳地帯に分布する定住農耕牧畜集落から派生した移牧拠点でも見られている(藤井, 2008)。

さらにこの遺構群の南部には、ワディを堰き止めるように建造されたダム状の石積み遺構(写真4)や基盤岩を2mも深掘した貯水槽を思わせる石積み遺構(写真5)も見つかっている。これらの建造物の機能はまだ不明であるが、乾燥地であることを考えると、水飲み場等の利用、あるいは簡易灌漑農耕への利用が想定される(Fujii, 2007)。

このような移牧拠点の遺跡では、どのような植物質食糧が利用されていたのだろうか。また当時の遺跡周辺の環境は、現在とどの程度異なっていたのだろうか。これらの課題を明らかにするために、フローテーション法による炭化植物種実の収集と分析にもあたっている。小型複合集落を構成する半地下式石積み遺構からは、多数の炉跡が見つかった（写真6）。このような炉の埋土を中心に、これまでにおよそ90点800リットルの土壌サンプルについてフローテーションを実施した（写真7）。その結果、栽培植物として、アインコルンコムギ、エンマーコムギ、オオムギが出土し、併せてエンドウ、レンズマメ等のマメ類も出土した（写真8）。野生の木の実としては、ピスタチオ類の果皮が多数出土し、この他にもイネ科、ムラサキ科、シソ科等の雑草類の種子が多数出土した。このことは、BC8000年頃に「肥沃な三日月孤」で栽培化されたムギ類やマメ類が、BC7000年頃にはヨルダン南部の乾燥地帯まで到達していたことを示唆している。このような植物質食糧を持ち合わせていたことによって初めて、安定的な移牧が可能になったのではないだろうか。栽培植物以外の出土状況からは、野生のピスタチオやイネ科草本が多数分布する環境であったことが想定される。現在は砂漠であるが、



写真5 ダム状遺構上流部に建造されている貯水槽状の遺構。



写真6 半地下式石積み遺構の炉跡。



写真7 ドラム缶とポンプを利用したフローテーション作業。



写真8 出土した炭化植物種子。上がエンマーコムギ、下がオオムギ。両方とも左から背面観、側面観、腹面観、横断面観。

当時はより植生が豊かな、ステップ草原のような環境であったことが窺える。ワディ・アブ・トレイハ遺跡は、砂漠地帯に立地するため、発掘やフローテーション作業が困難な遺跡である。しかし、定住集落遺跡だけでは知りえない、移牧を経て遊牧社会へと移行する過程を、具体的に復元し得る貴重な情報が詰まった遺跡である。

引用文献

- Fujii, S. 2007. Wadi Abu Tulayha and Wadi Ruweishid ash-Sharqi: An investigation of PPNB barrage system in the Jafr Basin. *Neo-Lithics* 2/07: 6-17.
- 藤井純夫. 2008. 新石器時代ヨルダンの移牧春营地—ワディ・アブ・トレイハ遺跡の第5次調査(2007)一. 第15回西アジア発掘調査報告集: 52-60.
- 本郷一美. 2008. 牧畜の発達と乾燥地帯への進出. *ニューステーター セム系部族社会の形成* No. 9: 11-12.
- (那須浩郎・本郷一美・藤井純夫 Hiroo Nasu, Hitomi Hongo, Sumio Fujii)